

研修Ⅱ 高松 ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習
子どもたちの対話を通して深い学びにつなげる
「親友ってなんだろうー『お手紙』ー」(東京書籍2年)

1 提案の概要

(1) 主張点

① 場面の移り変わりとともに登場人物が何をしたのかを順序立てて読み取るための手立て

ア 単元構成(1次)の工夫

挿絵を有効に使う場面分けをしたり登場人物の行動を読み取ったりした。その結果、物語のあらましをつかむことができた。

イ ペープサートの使用

ペープサートを使用し、叙述に立ち返って登場人物の動きを考えた。その結果、登場人物の位置関係についての理解を深めることができた。また、子どもたちは、場面の移り変わりや行動の叙述について気をつけて読むことができるようになった。

② 本文から根拠を探して想像を広げるための手立て

ア 単元構成(2次)の工夫

子どもから出た疑問をテーマごとに対話をしながら解決していった。深い学びにつながる価値ある対話を積み重ねることができた。

イ 単元を貫く学習課題「親友ってなんだろう」(子どもの初発の感想から出された疑問)の設定

子どもたちの主体的な読みを促すため、心情が表れた行動の叙述を探していった。そして、登場人物の行動を順序立てて読み取りながら想像を広げ、毎時間「友だちポイント」を積み重ねていった。その結果、単元の終末では、「親友」という言葉の意味を考えることができた。

③ 深い学び・深い読みにつながる、価値ある対話の積み重ね

ア 毎時間ペア対話を取り入れることで、読みの変容が見られたり、変容がなくても相手の考えに納得したりする子どもの姿が見られた。対話を積み重ねることによって多面的に物語を読むことができるようになった。

イ 仮定「もしも～だったら」と考えることで、叙述に戻って根拠を探し、想像を広げることができた。また、「もしも」の場合と本文の場合とを比較して考えることで、より深い読みができた。「もしも」と考えることは、子どもが読みを進めていくための1つのスキルとなった。

(2) 具体的な実践例

① 仮定「もしも、手紙を頼んだ相手が、うさぎだったら」

挿絵を使って物語の順序を視覚的に表し、これまでの学習を想起させる板書を行った。すると、子どもたちは、うさぎストーリーでは、失われる部分があることに気付いた。その結果、「失われた部分は必要か」という新たな疑問が子どもたちから出された。

② 物語の空白部分を考える。

新しい問い「手紙を待つ4日間はいらなかったのか。」について考えた。

○ 4日間に迫るためのしかけ

ア 板書

挿絵を提示し、視覚的に物語全体を想起させた。すると、子どもたちは、2人で手紙を待つ4日間もなくなることに気付いた。

イ うれしい気持ちのハート（数、大きさ）

本時までのがまくんの気持ちや4日間前後のがまくんの気持ちを想像し、ハートの数や大きさに変化をつけることでがまくんの気持ちを可視化した。その結果、子どもたちは、手紙を待っているがまくんは、うれしい気持ちだっただろうと想像することができた。また、その想像の裏付けとなる叙述を本文から確認することができた。

③ 空白の4日間の2人の会話を考える。（ペア対話）

空白の4日間、どんな会話をしながら幸せな気持ちで待っていたのかを想像させた。その結果、子どもたちは、4日間が2人にとって大事な時間だったことに気付くことができた。

2 成果

- 子どもたちは、対話を積み重ねることにより、「4日間は2人にとって楽しい時間」だと気付くことができた。そして、4日間の価値を認めることができた。読みが深まったと感じた。
- 空白の4日間の会話を考えることで、今までの出来事の全てがつながり、深い学びとなった。

3 課題

- 深い学びにつながる「もしも～」を使って対話することを他の教材でも行っていく。